

「教える」ことから「学ぶ」ことへ

—デイベート導入の試み—

計田 美保

はじめに

「月刊国語教育」（東京法令出版）一九九七年四月号には、児童・生徒たちの国語嫌いが二十数年間徐々に定着しつつあるという記事が載っている。こういう記事を見ると国語科教師として淋しい思いになる。この記事では国語嫌いの理由として、①明確な学習目標が持てない、②学習力法の不明確さ、③教材の問題、④指導法の問題、⑤評価の問題の五点が理由として挙げてあったのだが、このことは自分の授業を振り返っても思い当ることである。私自身が教科書から自立できず、ただ教科書をなぞるだけであったり、効率の良さを目指すあまり、知識注入型のマンネリ化した授業展開であったりする。自然と受け身的になつており、特に現代文では、読めばわかる日本語を改めて内容をまとめてもらっても、おもしろかったと感じることはないであろう。こうしてみると、学習方法、教材選択、指導法、様々な段階で、生徒の「学び」の視点を欠いたまま授業を行っているのではないだろうか。「学ぶとは何か」と

いう視点に立った平素の授業の反省と今後の授業のあり方の模索が私には求められる。

一、「学ぶ」をどうとらえるか

人間は本来、周囲と関わりたい、学びたい、自己を高めたいという欲求を持っている。この欲求は外的作用によつて、大きく変化する。考えざるを得ないような状況に置かれたり、好奇心を揺り動かされたりした時には、「自ら学ぶ態度・意欲」となつて表れるであろうし、支援や援助がなければ次のステップに上がることができず、欲求は萎えてしまうだろう。したがつて、教師の役割は、学習対象（知識）を教えることはもちろんあるが、その前提に生徒が学習する対象・状況を「自分と関係あるもの」としてとらえるよう誘導・支援することもある。その誘導・支援によつて「学ぶ意欲・態度」は触発されるのである。

「学ぶ」ことに重点を置くならば、生徒がどこまでできたかという結果だけを評価するのではなく、生徒がどのよ

うに変わっていったかという課程を大事にしなくてはならない。生徒がどういふ疑問を持ち、その疑問を解決するにあたってどういふ方法を取り、うまくいかないときはどのような工夫をし、どのような結論にたどりついたか。更に今度はどのようなことを調べてみたいか。その課程で支援し、評価することが、生徒の新たな意欲を引き出すことにつながるのである。この課程で培われる力が自分の生涯で「生きて働く力」―生活の中で生かすことができる力となっていくのである。したがって「学ぶ」にあたっては問題解決学習が大きなウエイトをしめているように思う。

問題解決学習においては、まず疑問・問題と出会うという場面があり、問題解決に向けて仮説・予想を立てる。それに基づいて調べていくわけだが、どういふ方法で処理していくか試行錯誤を繰り返す。試行錯誤の中で、各自が独自の工夫を重ねながら解決に向けて説得力のあるものを蓄積していく、それをまとめ、表現する。その過程が苦勞を伴うものであればやり遂げたときの満足感は大いいのであるし、楽しさを伴うものであればまたやってみたいと思うであろう。それがグループ学習の場合ではメンバーとのやりとりのなかで他を認め合いながら一つのものを作り上げていく連帯意識につながっていくことも考えられる。

こうした一連の学習過程において、なぜうまくいったのだろう、なぜうまくいかなかったのだろうという評価をおこなうことは、自分なりの学習方法を発見し身につけてい

くことにつながり、次時への意欲となっていく。問題解決学習において、自分の疑問を、自分なりの方法で調べ、考え、まとめ、表現する。これが「自ら学ぶ」過程であり、自己実現を図っていく力となる。教師の「教える」行為は自己実現を図っていく力となる。教師の「教える」行為は「学ぶ」場の設定であったり、支援や評価であると考ええる。

二、実践

1 「対話と論争」からディベートへ

社会問題である「いじめ」は異質なものの排除であるといわれているが、教科書に掲載されている「対話と論争」は異質なものととの対話の必要性を述べている。本年度も三年生の教材として使用し、倫理把握、内容理解に努めた。生徒は、筆者の見解がある程度理解はしたが、自分との関わりの中で、「対話」「論争」の必要性を実感しているようには思えなかった。そこで、生徒が「自ら学ぶ」という視点が弱かった授業であったという反省に立ち、今回はその延長としてディベートを試みた。試みの理由は、ディベート実践を通して、筆者の主張を実感できるのではないかと、もうひとつは、ディベートを生徒自身が行うその過程において主体的言語活動が可能となるのではないかとという二点である。ディベートを問題解決学習の一方法としてとらえ生徒が「自ら学ぶ場」となることを期待したのである。

教材 「対話と論争」中村 雄二著（尚学図書「新版現代文」）
目標 (1) 論理的な構成や論旨の展開を考え、要旨をとらえる。

- (2) 筆者の考え方を読み取り自己観察を深める。
(3) 多面的なものの見方の必要性を学び、視野を広げるようにする。

内容

(a) 対話とはロゴス（真理・真実）を分け合うことであり
(b) ロゴスに導かれて展開する。(c) 思考も自己内対話であり、
(d) 自己の社会的存在につながる。(e) 論争はともすれば感情に流されやすいが、訓練によって対話的性格を持つ。
(d) 対話や論争の本質は「生きる」ということに結びつく。(f) 人間は他者との相違・対立を通して初めて自己を知り鍛えることができる。

2 デイベートへの結びつけ

(1) はねかえりのある学習

対話・論争の必要性を教材を通して学んだが、実感に乏しい。デイベートを通して、対話や論争を経験し、その必要性を実感できるようにしたい、デイベートは論争に近いが、感情に流されないように留意することによって対話の本質に迫り得る。以下、デイベートによって「対話と論争」の内容（前記(a)～(f)）が体験できることを述べたい。

(a) 共通の論題のもとに相互が立論に努めることは、最終的

に真理を分有・共有することにつながる。

(b) 立論・反対尋問・反駁・最終結論と進行していくうちに両派は自己発展を遂げる。

(c) 論題設定・情報整理・論理組立という流れの中で、生徒は絶えず思考し続けることになる。

(d) 論題は人間の生き方や社会生活に関するものであり、それを追究することによって、自己の生き方が深まったり社会の一構成員としての自己を認識する。

(e) 感情に流されず、反対尋問や反駁を進めていく訓練の場となる。

(f) デイベートは肯定・否定の側に分かれて意見を出し合うものであるが、立場が違うだけであって、論題そのものに対する認識を深め、ひいては自己を見つめ直すことに変わりはない。

(2) 学びの場としてのデイベート

新学習指導要領で強調されているのが「個性の尊重」と「自己教育力の育成」ということである。「自己教育力」とは「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」とされている。加藤幸次氏は「自己教育力」として「学習課題解決能力」を挙げ、具体的に「学習課題をとらえる力であり、課題解決のための情報やデータを分析し、比較し、評価し総合するような力であり、更に結論を導きだしまとめる力であり、そこから新しい課題を発見する力である」と述べている。これらの力はデイベート実践の過

程で養い得るものである。

デイベートで取り上げる論題を生徒自身に決めさせるとテーマを探すために自分の身辺、所屬している社会集団、地域社会、国内、世界に目を向けそこに内在する問題を発見し、意識するようになる。論題を決めたら、次は情報収集である。情報収集は大まかに分けて二段階ある。第一はその事柄の背景知識・ガイドラインを得るための収集。生徒は「現代用語の基礎知識」「イミダス」「日本の論点」などの用語集や論説版を読み、基本的な知識を得る。第二は証拠資料を得るための収集。新聞、雑誌、書籍の記事から、自派の主張を論破する根拠となるものを収集していくのである。その収集した資料をもとに、立論を立て、相手の主張を予想し、それに抗する反駁を考えるのであり、まさに、分析と総合が行われる。最後にデイベートマッチを迎える。この時の言語活動によってこれまでの活動が披露されるのであるから、当事者たちは審査員を意識し、声量、速さに気をつけながら、臨機応変に答弁せねばならない。努力や苦勞を重ねてデイベートをやり終えた時、班員は心地よい充実感を味わうことができる。審査員は他の班の発表を判定するうちに、良き聞き手となり客観的に評価する態度を身につける。これら一連の過程は、生涯学習の時代となった今日、人が生きる上で必要な力である。よってデイベートは自己教育力育成の一助となり得ると考える。

デイベートに関しては、自説の強引な押しつけとか、口

舌の徒を育てるといった批判もある。デイベートをやり終えた時、自分たちへの支持が多ければ、社会的に自分たちの主張が認められたと誤解する生徒もいるかもしれない。しかしデイベートを知的ゲームとしてとらえ、結果よりもその過程に意義があると見るならば、デイベートには国語教育の閉塞状況を切り開く鍵があるように思う。

3 デイベートによって養われるであろう力

次に挙げるのは、「デイベート授業で身につく力」である。これらは②で挙げた「自己教育力」と結びつく。

つまり、「学ぶ意欲・態度」によって結果的にこれらの能力が引きだされ、それは生涯にわたって役立つものである。

(1) 客観的分析

デイベートでは一つの論題に対して、肯定・否定の立場に立つて意見を闘わせる。それぞれの立場は、自派のメリットだけを述べれば良いのではなく、自派のデメリットや相手のメリット・デメリットを予想し、それに耐え得るだけの理論も積み上げねばならない。つまり、デイベートにおいては物事を多面的に見て処理する能力が求められる。

(2) 論理的思考力

デイベートでは、ただ感情的にがなり立てるだけでは評価されない。自分たちの主張が相手より勝っていることを相手に納得させるためには、自分の意見を論理的に組み立て、筋道立てて述べる必要がある。明確な根拠になりえている

か、相手の言い分に矛盾はないか、論理の飛躍やこじつけはないかなどを見極める力が要求される。

(3) 発表能力

まずディベートのための準備段階の班学習において相互に意見を出し合う。更に本番では、相手側に聞こえるように明瞭に発表するのももちろんであるが、審査員全員に聞こえるような声量で発言することが要求される。話す速さが適当であること、持ち時間を有効に利用することも大切である。

(4) 聞く力・理解力

班学習において、論題選択、情報収集・整理、作戦立案の過程で班員は検討を重ねるが、まず班の中でお互いの意見を交わし、相手が何を言おうとしているかを注意して聞く。インタビュも、礼儀とともに、聞く力を必要とされる。本番では反対尋問、反駁するために、相手の論理の弱点や自派と他派との主張の相違を探すべく注意深く聞くことになる。審査員は、流れを書き留めたり、判定をくだすために、神経を集中することになる。この場合も即座に要旨をつかみとる力が必要である。

(5) 情報収集・整理力

自分たちの主張を論証するためには、相手や審査員を納得させるに足る証拠を集めなければならない。情報化社会と言われるように、現代は新聞・雑誌・書籍・テレビ・インターネットなど多くの情報に恵まれている。その中からどの材料をピックアップし、どのように整理して用いるかを

自分たちで考えねばならない。

4 「学ぶ」ことへの転換のために工夫した点

次の三点を工夫することによって、生徒の「学ぶ」ことの実感が大きくなるだろうと考えた。

(1) 班学習

一班八名(肯定側四名、否定側四名)を基本的な形とし、クラスの中で座席にしたがって便宜的に分けた。平素仲の良いもの同士が班を形成した場合は、異質な意見との出会いにならず、融和的になってしまふからである。一斉講義型の授業では自分の意見を持つていても言えないでいる生徒も、少人数の班のなかでは自分の意見を積極的に出し、それに対する賛同の声や異論を聞く中で、より考えが深まっていくなかではないかと考えた。班学習は、生徒が主体的積極的に学習する場、また相互理解を図る場としての意味合いを持つ。指導者は、班活動が停滞しないように、毎時学習目標を提示したり、適宜アドバイスを入れるように努めた。

(2) 課題選択

論題を自分の班内で選び出し、話し合いによって決定させた。自分の興味・関心を活かし、論題を追究するのだから生徒にとつては主体的、意欲的な学習になるし、他の班とは異なる論題となるため、オリジナリティーを感じる事ができる。また、少々困難な局面に突き当たった時も、責任転嫁はできず、自班が協力することで乗り越えていける

だろう。そして何よりも、試行錯誤の末、ディベートを体験した時、それが満足のものだった時はなおさら、成就感、充実感を味わうことができ、その感動は次時への意欲となっていくだろう。

(3) 相互評価

ディベート討論の時、討論を行う班、計時係、補助係以外は、すべて聞き手（審査員）となる。審査員は審査カードに討論の流れを記入し、判定カードに各項目五満点で採点していく。判定カードを実施班に渡し、班では点の集計、良かった点、改善点のコメントを集約する。このように相互評価を行うことで、聞き手を意識してわかりやすく話す力、人の話の要点を意識して聞く力、客観的に分析する力が養われるものと考ええる。また、これまで気づかなかった相手の良さを発見し、クラスの活性化につながる。

5 ディベート指導計画

時	学習目標・過程	助言・支援
1	ディベート学習の目的や方法を理解して、意欲を喚起する。 ①「対話と論争」を経験し、筆者の主張を再確認しようと呼び掛ける。 ②ディベートについて説明を聞く。 ③これからの学習計画を書く。 ④班分けをする、司会を決める。	生徒の意識調査のためにアンケートを取る。 「対話と論争」の要旨を確認する。 これから資料をためていくファイルを一人ひとりに持たせる。 基本的には一班八名。 まだ肯定・否定には分けない。

1	2	3
<p>ディベートにふさわしい論題を選定する。</p> <p>① 論題例を見て、論題の種類を知る。</p> <p>② 身近な問題、最近の時事問題をとり上げ、班で話し合う。</p> <p>③ 論題を絞り、決定する。</p> <p>④ 肯定側、否定側に分かれる。論題にふさわしい情報を収集し、整理する。</p> <p>① 図書室で参考文献の紹介や、書架の配置の説明を聞く。</p> <p>② 論題に関する情報を可能な限り集め、情報カードに記入する。</p> <p>③ アンケートの内容を考え、作成する。</p> <p>④ 回収したアンケートを集約する。</p> <p>⑤ 収集した情報を整理する。</p>	<p>背景知識を得る資料としてフレアレンスブックを紹介する。証拠資料としての書籍、新聞、雑誌を紹介する。</p> <p>アンケートの内容に目を通す。</p>	<p>自派の論、予想される反論などを論理的に組み立てる。</p> <p>① ディベートのビデオを視聴・記録し、フォーマットをつかむ。</p> <p>② 哲学、定義は両派で考える。</p> <p>③ 自派の現状分析、プラン、メリット、デメリットなどを分析し、他派のものも予想する。</p> <p>④ 予想される他派の主張に対する反対尋問、反駁を考える。</p> <p>⑤ 本番の役割分担をする。</p> <p>⑥ 主張原稿を完成させる。</p>

<p>3 論題ごとに両派に分かれて討論する。</p> <p>①黒板に自派の論点を書く。</p> <p>②司会者は冷静に進行させ、計時係と連携し時間を明確に示す。</p> <p>③立場、作戦タイム、反対尋問、作戦タイム、反駁、作戦タイム、最終結論と進行する。</p> <p>④審査員は、審査カード、判定カードに記入する。</p> <p>⑤討論終了後、判定カードを集約する。</p> <p>⑥指導者の講評を聞く。</p> <p>⑦事後アンケートに答える。</p>	<p>会場を設営する。</p> <p>司会者、計時係、補助係を予め決めておく。</p> <p>一時間(五十分)に、二班が討論できるよう時間配分に気をつける。班の交替を迅速にさせる。</p> <p>審査カード、判定カードへの記入を促す。</p> <p>討論終了後両派に集約カードを渡す</p>
---	---

6 論題一覧

三年四組

- 一班「中・高生のSEXは許される」
 - 二班「死刑制度は廃止すべきだ」
 - 三班「洋食は和食より体によい」
 - 四班「選挙権は社会人になってから持つべきだ」
- 三年六組
- 一班「日本は乗用車の免許取得を十六才からにすべし」
 - 二班「脳死者からの臓器移植を認めるべし」
 - 三班「ファミコン・テレビゲームは子供の成長にとって有益である。」
 - 四班「高校の学校給食は必要である」

- 五班「賀茂高校をスリッパにすべきだ」
- 三年八組

- 一班「脳死者から臓器移植を認めるべし」
- 二班「小学校に英語教育を導入すべし」
- 三班「男女の間に友情は成立する」
- 四班「日本は選挙権を十八才からにすべし」
- 五班「性転換は戸籍上認められるべきだ」

7 評価

(1) 評価の観点

たとえダイベートを問題解決学習の一方法としてとらえ、自己教育力の育成を目標としても、評価が自己教育を尊重したものになっていなければ、結果的に自己教育力を育成することは難しい。したがって、自己教育力の育成を尊重する評価においては、学習の結果よりもその過程での評価を重視することが必要になるであろう。学習の結果として何がわかったか、わからなかったかの評価ではなく、学習の過程において、意欲的に学習に取り組んでいるかどうか、もし取り組んでいないとすればどこに原因があるのか、どうしたら意欲的に取り組ませることができているのか、そのためにはどのような手立てが必要なのかといった観点から、学習への意欲を高めたり自己教育を支援したりするような指導的評価を行うことが必要となる。したがって、ダイベートの過程ごとに、評価の項目を挙げ、その態度がどうであっ

たかを観察・評価するものとする。

〈論題設定において〉

①身近な問題・社会事象に対して興味・関心を持ち、積極的にこれを考えようとしたか。

②問題意識が論題として成立するかどうか吟味したか。

〈情報収集において〉

①論題にふさわしい情報を積極的に収集しようとする意欲を持ったか。

②自分の立場や相手の立場を考えて、効果的な情報を選び出したか。

③情報を的確に分類・整理できたか。

④仲間と協力できたか。

〈作戦において〉

①作戦カードに沿って、意欲的に論理構築ができたか。

②収集した情報を有効的に利用することができたか。

③構築された論理は緻密で説得力にすぐれているか。

④自分の考えを積極的に示したか。

⑤班の意見をまとめ、建設的な話し合いとなったか。

⑥原稿に基づいて事前に練習したか。

〈ディベート・マッチにおいて〉

①論点が確実に示され、内容が説得力に富んでいたか。

②相手の立場や主張の根拠・論点を的確に聞き取っているか。

③話す速度や声量は適当であったか。真剣かつ意欲的な態度だったか。

④作戦タイムを有効に、仲間と協力して使うことができたか。

〈審査において〉

①話し手の立場や主張の論点を的確に聞き取っているか。

②話し手を尊重して、公正に、誠意を持って審査しているか。

〈事後アンケートにおいて〉

①客観的に、冷静に自己の学習経過を振り返り、成果や課題を発見しているか。

②用語や表現が適切で、わかりやすい文章か。

(2) 評価方法

①指導者の観察による方法

②生徒のワークシートの分析による方法

③生徒の発言の分析による方法

④ディベート・マッチの分析による方法

⑤生徒による自己評価や相互評価による方法

8 「学び」の過程

生徒の姿・学習活動	教科書「対話と論争」をやり終える。世界各地の内戦、広大の留学生、親の考えとの違いなどから現代社会において「対話」「論争」の必要性は感じた。	教師の支援・援助
ディベートの説明を受け班分けする。中学校の時ディベート経験があり、抵抗はなかった。グループ内の構成員は三年生になってから知り合った人ばかりなので、少し不安を感じた。	各自の意見を聴く。	ディベートマッチ再現用紙を配布。一グループ八名に分ける。

<p>論題を選択する。他の班が決めそうな論題は避けた。医療分野で多数の者が未知であった「脳死」の問題に大半の者が興味・関心を持った。新聞記事から少し情報を得ていた○君が説明するとすぐ肯定・否定の意見が出た。</p>	<p>情報収集する。自分の希望が叶い否定側になる。「脳死」「臓器移植」についてまず知ろうということと役割分担し、自分は「脳死とはどういう状況か」をまず調べることにした。三カ月分の新聞の中から関連記事を切り抜いたり、文献の中から関連部分をコピーした。今度は否定側の証拠資料として使えそうな情報を集めた。父の協力を得てインターネットで検索した。アンケートは実施しなかった。アンケート項目を立てるのは我々に基礎的知識があつてこそだから、まず我々が知識を得ることが先決だったからだ。お互いに調べたことを情報交換しながらすすめた。自分が調べたこと、しかもそれが自派に有利な場合は、興奮気味に話した。</p>
<p>ディベート未経験者を配慮して論題例の用紙を用意した。</p>	<p>図書室の司書教諭と連携。図書室の書架の説明。関連文献を紹介。論題について背景知識をまづ知ること、次に根拠となる資料を集めるように指示する。資料の出典を記入させる。</p>
<p>協力を目録に上げ、これまでの資料を活用するよう呼び掛けている班には相談に乗る。</p>	<p>論理を組み立てる。立論・尋問・反駁・最終結論、どの場面も皆でこなそうということになり、効果的に緊張感を持って協力しあえた。臓器移植法が制定されそうな時期だったので肯定側に有利な情報が圧倒的に多かったが、我々は倫理面、心情面で攻めることにした。論理の組み立てができたはずと後で、それまでは「脳死」や「臓器移植」に関する意識をそらせるのがたいへんだった。医療や法律の難しい語が並び、ともすれば感情的になつたり、自分が肯定か否定かわからなくなってしまうこともあった。そんな時は他の者が初めから説明してくれたり、客観的な意見を述べてくれ、軌道修正することができた。</p>

<p>ディベートマッチ 時間制限があるので、端的、効果的に進行させるために、「脳死判定」については模造紙にまとめて掲示した。討論は一過性のもので、聞き手が聞き逃すと自派に不利だと思つたし、視覚的にも訴えたかった。発表者の改善点は作戦タイムでお互いに注意しあえた。ある程度筋書きを考えていたのと、それ以外の展開ができなかった。後で考えたともっと相手の弱点をつくべきだったと後悔した。</p>	<p>班交替を速やかに行わせる。</p>
<p>相互評価 「資料が確かだった」「態度が堂々としていた」「チームワークが良かった」という称賛の言葉を評価表や口頭でもらつたのはうれしかった。評価表を班内で見ながらうなずいたり反省したりした。相手の良さが発見できていた。</p>	<p>公平な判定を促す。 コメントもなるべく入れるように指示する。</p>

四 成果と課題

1 ディベート学習を通して生徒は自ら課題を選択し、自ら解決方法を見だし、自らの意見を持ち、自らが学習の成果を発表した。それは、生徒が主体的に活動する姿であり、「自ら学ぶ態度」とみなすことができるであろう。そして自己評価、相互評価を通して言えることは、生徒はディベート学習の過程と成果に一定の成就感や満足感を感じているということである。「自ら学ぶ姿勢」は人に満足感をもたらし、さらなる意欲をかきたてるといつてよい。ディベート学習は問題解決学習の一方法となり得るし、「自ら

学ぶ姿勢」を作り出す場となり得る。参考として生徒たちの具体的な資料収集を挙げる。

◆家庭科の先生にいろいろなお話を聞いたり、本を貸してもらったりした。

◆社会科準備室に行き、「国勢図会」を貸していただいたり、パソコンで資料を出していただいた。市の図書館へ行き、コンピューターで手当たり次第本を探した。

◆日本弁護士の子供の権利条約のテレフォンサービスにかけて話を聞いた。親切な弁護士さんだった。

◆英語の塾に通っている小学生に質問した。

◆姉の自動車学校の学科教本を借りて有利な点を見付けた。

◆私は三原の県立福祉短期大学の図書館を利用させていた。だきました。(県民ならOK!)そこには医学に関する資料はいろんな分野でそろっているのですが、まず人の死や脳死、また移植の方法や移植後の人の状態を医学書からまとめた。そしてその後脳死移植にまつわる問題や倫理面の本を読んで否定に有利な点をピックアップした。

◆私は、MACを使ってインターネットを資料としました。これは自分の知識を深めるために役立つと思います。ホームページを開いているその人の個人的な意見も肯定側、否定側の両方の意見があり、客観的に見る事ができた気がします。

2 教科書教材選定には、生活や人生について考えを深め

させるという観点も盛り込まれている。ここで指導者が気をつけなければならないのは、指導者が教科書教材をなぞるだけでは、生徒が自分の生活や人生を掘り起こすという営みには転化できないのである。指導者は教科書を、生徒が社会に対応できる資質を養ったり、主体的な言語活動ができるような学習材料に変えていかなければならない。今回のダイベート学習導入の動機は、教科書教材「対話と論争」を「自分と関係あるもの」としてとらえてほしいという願いからであったのだが、教科書を学習材料に変えていく糸口になり得た。ダイベート学習は現代を生きる資質を高め、日常的感觉に即した切り口で教科書を補完する役割を果たしたと思う。参考のため生徒の感想を挙げる。

◆私たちは生きていく上でさまざまな問題にぶつかる。その問題の解決を大衆の傾向に委ねては自分のためにはならない結果となる場合もある。そこでダイベートが必要になると私は考える。正しい答えを導きだせるかどうかには疑問を持っているが、自分に有利な状況を作り出せると私は思う。現代は多くの問題が飛びかい、うつかりしていると何に巻き込まれるかわからない。「自分で問題を知り、自分の考えを持ち、自分なりの解決法を見付けて訴える」これは生きていく上で必要不可欠なものであると思う。たとえ、自分の意見を持つていたとしても、それを人に伝えることができないければ意味がない。ダイベートを通してお互いの主張を交わし、最も良い結

論を導きだすということは、よりよい人生を送るために必要であると思はる。

◆事実がどこにあるのか、どれが良いことで、どれが悪いことなのかわかりにくい時代だからこそ、ディベートを行って互いの思想を交わし合って、何が事実に近いのかを冷静に導きだし、理解し合う必要がある。今日の情報社会のなかでは多くの情報を取り入れただけで自己満足することは珍しくない。が、個人の思想・視野にはやはり限界があるので、他人の持つさまざまな意見に触れて視野を拡大しながら自分の思想を正しい方面へと発展・改善してゆくべきだと私は思う。(正しい方向というのは自分のなかの正義に基づいて選択される方向として。真理なんて言うのはだれもが知っている事柄ではないし世界に一つだけというものでも、絶対にあるというものでもないと思うから)そしてそれは社会単位で行わなければならぬ。そしてこれが現代社会におけるディベートの必要性ではないだろうか。

3 ディベート学習は、予想した以上に生徒の相互理解に役立ったように思う。生徒の感想文に、「チームが協力してできたのが良かった」「自分の意見に対して、他の人が言ってくれるようになるほどと思った」「他の班の発表を聞いてみると、いつもはあまり話さない人が堂々と意見を述べていてすごいと思った」「相手の班の○○君の結論を聞いて

たときはやられたと思った」などであり、級友に対して、新たな意見をしたり、称賛の声を送っている。また、自分たちの発表に対して付けられたコメントを見て、たとえそれが改善点であっても、感謝の気持ちを持っている。ディベート学習では一人ひとりが主体であり、「自分が学ぶ」という実感は「人が学ぶ」ことを尊重することにつながるのではなからうか。

4 評価については、まだまだ私自身の認識の甘さを感じる。根本的に自分自身が伝統的な評価観を拭いきれないでいるため活動状況によって評価することに多少のためらいがある。主観的傾向になりやすいのではなからうか、全ての生徒の活動状況を把握しきれないだろうかという気持ちが躊躇となる。しかし、自己教育力育成には、教師による観点別学習状況評価や生徒による自己評価・相互評価を取り入れた指導的評価が重要であることは先に述べたとおりである。観点別学習状況評価においては、評価基準をさらに検討し、生徒の学習活動が継続して記録でき、使いやすしい評価表に改良していく必要がある。自己評価・相互評価については、生徒が学習を振り返ることによって、次時の活動への意欲が高められ、互いの良さを発見できるものに工夫していく必要がある。

おわりに

思いつきから始めたディベートであったが、生徒の活動状況は私の予想以上のものであった。論題選択ではなんとかなるさというような甘さもまだ見られたが、情報収集での協力、論理の組立での意見交換、説得、納得、ディベートマッチ当日の意見の応酬、連携プレー。それらは普通の講義型の授業では見られない生徒の姿であった。活動していることが即「学んでいる」ことには結びつかないかもしれないが、反省と課題を見いだしたり、力が多少身についたと実感している点からはこの学習の当初の目的をある程度達成していると評価できる。何よりうれしいのは、やり終えた後で私自身が生徒を見る視点が変わっていることである。中間考査では成績がふるわなかった生徒が堂々と反駁する姿は、生きていく力を感じさせる。テストでは測れなかった言語音声表現力、情報収集力の確かさを感じる。確かにディベート学習期間中は私自身が多忙であった。図書室やビデオ視聴室を確保するため連絡をとったり、事前に生徒へ教室を指示したり、ファイルを持ち運びしたり、アンケートを事前に見たりと、かなり煩雑であった。三クラス同時展開は無理かなと弱気にもなったが、これらは効率的な運営を考察することで解消していききたい。また初めてのディベートで、後から気づくことが多く、その場その場での指導・助言が必ずしも適切ではなかった。私自身の反省や、生徒が記入したよりよいディベートへの提言をも

とに、次回はより質の高いディベート学習が実践できるよう研修していきたい。

(広島県立賀茂高等学校)